慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	八文字屋刊行浮世草子類書誌提要
Sub Title	
Author	林, 望(Hayashi, Nozomu)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	1980
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.17 (1980.) ,p.457- 480, [1]
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-00000017-0457

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

八文字屋刊行浮世草子類書誌提要

林　望

序説

所謂「八文字屋本」という名称の定義は、長谷川強氏が左の如く規定されたのが現在では大方の定見となっていよう。

狭義には京都の八文字屋八左衛門方から刊行された浮世草子に、前半期の中心作者であった其磧の作で他書肆より刊行されたものを含めての称とする。広義には同時期同傾向の作及び八文字屋小説の亜流作品を含めての称とする。（注1）

これは、内容上よりすれば妥当な定義であると認められる。然るに、書誌的方面については、次の様な考え方が行なわれているように思われる。

其磧は一時八文字屋から脱退して、別に江島屋なる新本屋を設け、自作出版を企て、一方谷村、菊屋等からも其作を公にする等の事あり、版元は八文字屋以外数軒に亙るも、作者が一人であったから、製作出版上に意匠の共通する所多く、且は八文字屋の出版が模範的であったから、其れに倣ふ所少なからず、版式體裁等當時の浮世草子はすべて八文字屋式に同化してゐた（『新撰列傳體小説史前編』水谷不倒氏P322）

私は、浮世草子類書誌調査をすすめる過程で、ここに一つの疑いを抱いた。果して、水谷氏の断ぜられた如く、すべての浮世草子が「八文字屋式」に同化していたと看做し得るであろうか、さてまたその「模範」となった八文字屋式の版式とは一体如何なるものであろうかと。

そこで私は、今、長谷川氏の所謂「狭義」の「八文字屋本」を更に狭く絞って「八文字屋八左衛門方より刊行されたる浮世草子、及び八文字屋と他書肆との共同出版（相板（あいばん）といわないには訳がある。）にかかる浮世草子」に就て、その書誌を詳細に調査し、そこに存する共通の性格、又その遷移などに関して、考察を加えてみたい。即ち「狭義の」八文字屋本の中から、其

磧が菊屋方や谷村清兵衛方など八文字屋以外の書肆より出版した幾つかの作品を除外して「八文字屋八左衛門」の出版意識を探ってみたいと考えるものである。本稿が「八文字屋本書誌」とせずに「八文字屋刊行浮世草子類書誌提要」と題したのは、この理由に依るのである。

さて、そこで右に述べた八文字屋刊行浮世草子類は、一体何種位あるかというと、長谷川氏の『浮世草子の研究』を中心として、其外、八文字屋刊行本所附蔵板目録など参照して考えるに、全部で百三十一種を数えることが出来る。これは改題後修本を除外した数である。其内七点（注2）は、現在所在が知られないか、又は海外にのみ伝存しているなどの理由で、原本未見であるが、残りの百二十四種に就ては、大方調査を終ったので、此等を対象として考察を進めたいと思う。（注3）

㈠書型について

(A)大本

享保五年以降は、大半大本五冊という型式を以て板行せられている。この型式の、八文字屋に於ける最初の作品は、正徳二年序刊の『頼朝三代鎌倉記』五巻であろうかと思う。尤もこの書には刊記が無いから、版式、他書所附八文字屋蔵板目録などより八文字屋刊と推定してかくいうのである。刊記を有するものとしては、翌年刊の『当世御伽曾我』『風流東鑑』前後編十巻が最も早い。同じ頃の刊行にかかると推定される『名物焼蛤』『当流曾我高名松』の二書には刊記が無いので、その詳らかな刊年月を明らかにしないが、或いはこちらの方が早いかもしれぬ。（付言すれば、この二書は、版式より見るときは、八文字屋以外の刊行本である可能性もある。）いずれにせよ、八文字屋が大本浮世草子を刊行しはじめたのは、正徳年間であると見てよい。

元文度以降にあっては、殆ど大本型に統一されてしまうが、同じ大本でも、その大いさは、漸次縮小して行き、末期には、半紙本と殆ど変らなくなってしまうので、或いはこれを半紙本と見、或いはこれを大本と見るというような観察の不統一が生じて来やすい。外寸の漸減傾向に伴い、匡郭寸法も徐々に小型化して行く、その様相は別図推移グラフの通りである。

そこで私は、

『善悪身持扇』三巻　享保十五年刊

『陳扮漢』三巻　天明六年刊

の二点を除くすべての縦型本を大本と認定しておきたいと思う。（升屋和泉屋などの求板後印本は、八文字屋原刊本より一廻り大きいのを例とする。）

(B)半紙本

(A)で取扱った大本は、外寸では『名物焼蛤』の二十五・二糎×十七・三糎（東北大学狩野文庫蔵本）あたりを最大とし、『陽炎日高川』（宝暦八年刊）の二十二・四糎×十五・九糎（岩瀬文庫蔵本）あたりを最小とする大いさに、概ね漸減的に分布しているのであるが、(A)に除外した二点のみは、これより一段と小

さい。即ち、

『善悪身持扇』二十一・九糎×十五・六糎（大阪府立図書館蔵本）

『陳扮漢』二十二糎×十五・七糎（岩瀬文庫蔵本）

又、匡郭の寸法を示すと、

『善悪身持扇』十九糎×十三・九糎

『陳扮漢』十八・二糎×十三・七糎

となっている。この寸法のみを比べると、最小のものと竪横数ミリ程度の差であって、大して問題になるまいとも見えるのであるが、これらを、享保十五年頃の大本が、大体外寸二十四糎×十七糎前後、匡郭高二十糎前後、又宝暦末より明和安永度にかけての大本が、外寸二十三糎×十六糎前後、匡郭高十九糎強あたりにほぼ一定しているのに比較するならば、右二点が一廻りずつ小型に作られ、これらを半紙本と認むべきことが是認されようかと思う。（付グラフ参照）

(C)横綴半紙本

横綴半紙本とは聞きなれぬ名であるが、私は、一類の八文字屋浮世草子に対し（極く稀に八文字屋以外にもこの書型をとるものが存する。）（注4）新たにこの名を以て呼ぶことを提唱するものである。従来は、八文字屋本の横本型のものに就ては、一概に「横本」とし、長谷川氏も「横本にも大小があり」（注5）という程度しか指摘されておらないので、八文字屋の横本といえば、文学史的にも意義あることとされていながら、誰もこれを区別しないで二ツ切横本と誤っていた（注6）のは怪しむべきことと言わねばならない。

今私がかく名付けるのは次の九点である。

『傾城禁短気』正徳元年刊　六巻

『浮世親父形気』享保十五年刊　五巻

『風流西海硯』享保二十年刊　五巻

『風流連理憲』享保二十年刊　三巻

『兼好一代記』元文二年刊　五巻

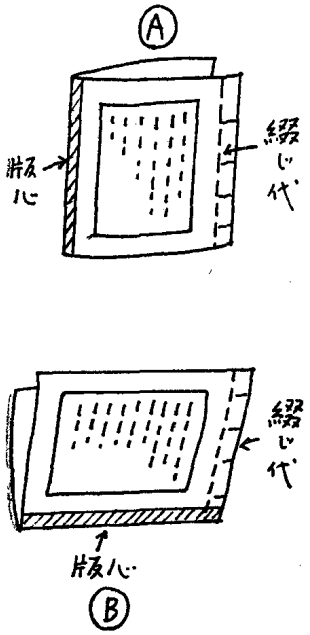
『風流西海硯』元文二年刊　五巻

『花襷厳柳島』元文四年刊　五巻

『禁短気次編』明和二年刊　五巻

『禁短気三編』明和二年刊　五巻

以上九編の書型は、まことに変態であって外に類例を知らない。即ち、大いさは、半紙本に同じである。ただし綴じ方が異相であって、通常の半紙本は、半紙を半折にして図Ⓐの如く版心の反対側の二枚になった処を綴じ合せる縦型本であるが、此の類の加きは図Ⓑの如く



半紙を半折にし、版心を下にして横向きに綴じるのである。（それ故、版心が書根になる。）従って、大いさは半紙本であって、書型は横本ということになる。今仮に「横綴半紙本」と名付けた所以である。管見では、浮世草子以外には、未だかかる書型に接した事は無いので、この書型の由来、又類例など、大方の御示教を願うものである。（注7）

(D)美濃版二ツ切横本

享保三年以前の八文字屋刊本は、多くはこの二ツ切本である。八文字屋本の嚆矢と考えられている『けいせい色三味線』の好評に倣って、暫くは専らこの書型に依ったものと見える。

八文字屋刊行本を、史的に眺めてみると、二ツ切本が行なわれたのは、ほぼ、享保三年迄であって、以後は、大本・横綴半紙本にとって代られた。この例外として、享保五年以後にも二ツ切本を以て刊行せられたのは（改題後修本は除外して）次の六点に限られる。

『役者色仕組』享保五年刊　五巻
『舞台三津扇』享保七年刊　五巻
『けいせい哥三味線』享保十七年刊　五巻
『風流友三味線』享保十八年刊　五巻
『遣放三番続』安永元年刊　五巻
『浮世壱分五厘』安永五年刊　五巻

以上の作を概観すると、いづれも『けいせい色三味線』の亜流ともいうべき作、又役者評判記開口集といった種類の作ばかりである。即ちこれらは、営業政策上の理由から、『けいせい色三味線』を髣髴せしむべく作られたものである。従って八文字屋刊本は、かかる作を除いては大方、大本・横綴半紙本へ移行して行った事が分るのである。

(E)半紙二ツ切横本

享保三年以前の美濃二ツ切横本の大いさは概ね竪十三糎×横十九糎前後、匡郭高十一糎前後を例とするが、中に一点だけ一廻り小型の、半紙二ツ切本と認むべきものがある。次の一点である。

『遊女懐中洗濯』〔宝永六年〕刊　寸法十一・六糎×十五・九糎、匡郭高九・四糎（蓬左文庫蔵本―存巻四一冊）

以上の如く、八文字屋方より刊行された浮世草子には、大本、半紙本、横綴半紙本、美濃二ツ切横本、半紙二ツ切横本の五種の書型があると見て良い。此等の書型の遷移については、後に、他の書誌事項の推移と共に考えることにする。

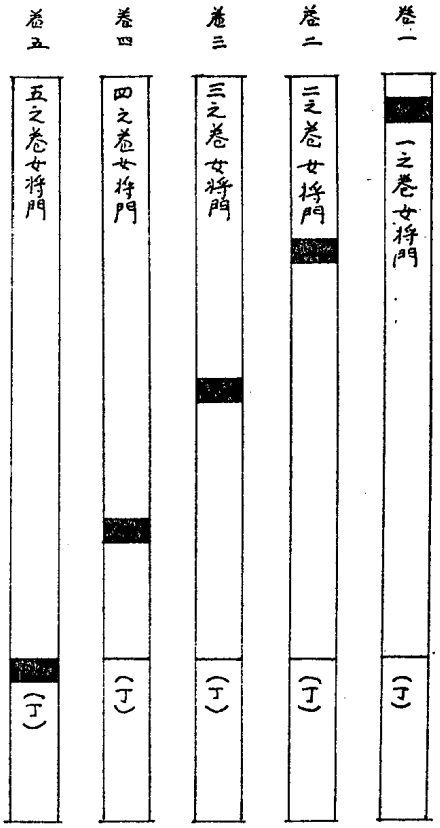
(二)版式上の特色について

(A)版心の型式

八文字屋刊行浮世草子は、享保三年を期として、書型、作者名の表記、刊記、丁付の様相など、色々な面について、大きな変化を遂げる。この享保三年というのは、外ならぬ自笑と其磧の和解した年である。

然るに、前後八十年余に亘る八文字屋の浮世草子刊行史を通じて、一貫した版式上の特色を求めるならば、それは版心の様式に存するという事が出来る。左に、最も典型的な（軌道に乗った全盛期の）版心を示す。

『女将門七人化粧』五巻。大本五冊。作者名自笑・其磧。享保十二年刊。



右の如く、版心に巻次を標示する謂わば太目の横線とでもいうべきものを巻の下るに従って下に置くのを例とする。これを書誌記述上の術語として何と呼ぶべきか知るところがない。こうした巻標示（右の様な場合これを今仮に「黒格」と称しておく。）を付刻せることは、元禄十四年刊『けいせい色三味線』以来、明和六年刊『略縁記出家形気』に至るまで、その書型と作者とを問わず、一の例外もない。（安永以後の刊行書については、この限りでない。）但し、巻標示は、上図の如き黒格を以てするとは限らず、「江」「哥」などの漢字を以てする場合、「〇」や「一」などの記号を用いる場合、「▬」の如く双黒格形式を採る場合、又それらを併用する場合など各種あって一様ではないが、これらの使い分けは、決してデタラメでなく、凡その法則が認められるようである。

尤も、かかる標示は八文字屋の専売特許ではなく、稀に他書肆の刊行本にも存し（注8）又、辞書類などには散見する処であるが、少くも、八文字屋の浮世草子は、殆ど全てこの様式を採るのであるから、これを八文字屋の版式上の一大特色と見ることは不都合がないであろう。そこで、この様な版心の型式を「八文字屋様式」と呼んで可ならんかと考える（注9）。先に関場武氏は「毛利貞斎編『増続大広益会玉篇大全』」（一九七七年芸文研究第三十六号所収）の中で、元禄五年版『増続大広益会玉篇大全』の解題中に類例を報告されたが、こうした黒格を「黒い部分」と称しておられる。蓋し書誌記述上の術語に苦しまれてのことであろうかと推察する。そこで私は、こうした巻次を標示する部分を「巻標」と呼んではどうかと提唱したい。勿論然るべき術語があるのならば、それに従いたいと思うので、先学の御示教を得たいと念じている（注10）。ともかく、かかる型式の版心に就ては、従来の、白口、黒口、魚尾、という様な術語を以てしては能く表現し得ざる処であって、例えば、浮世草子の書誌記述については、

「版心八文字屋様式、巻標黒格」

の如くせば、ほぼ誤りなくこれを表現し得るのではなかろうか

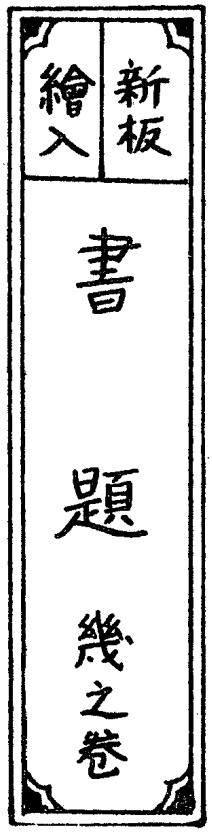
という考えを提出しておきたい。

(B)其外の版式上の特色

享保五年以降の八文字屋浮世草子は、極めて統一された形式を以て刊行せられている。その概要を示せば、次の諸条の如くである。

①書型は大本又は横綴半紙本を原則とす。

②題簽は左の形式・意匠による。

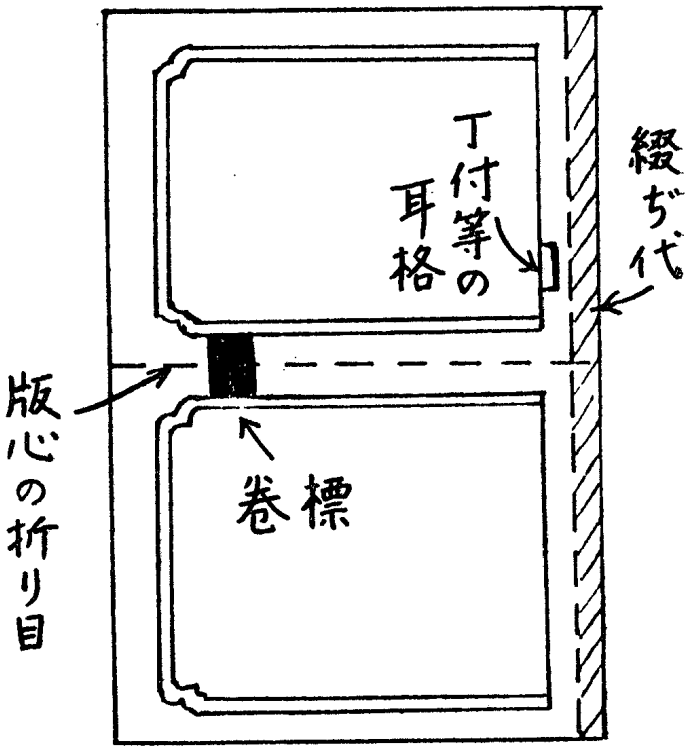


③序は一丁、序題なし。序末に年記と作者名を刻し、作者名下に印形を模刻す。

④各巻々頭に目録各一丁。各巻三章を原則とす。

⑤内題なし

⑥大本の場合、四周単辺、無界、毎半葉十二行。横綴半紙本の場合は、多く隅入三方双辺（左図の如く）。無界。毎半葉十四行。



（一丁を開いた時の図）

⑦挿画は毎巻二面。第一画は各巻四ウ五オの見開きとし、第二画は巻の丁数により一定でないが、終りから数葉目に見開きで入れる。祐信風を主とし、狂言絵尽等の如く、挿画中にセリフ・説明などを附刻す。

⑧尾題なく、各巻末に「一（～五）之巻終」と刻すを例とす。

⑨刊記は、一例を左に示す。

「元文三年午ノ正月吉日ふ屋町通せいぐはんじ下ル町八文字屋左衛門板」

（『忠孝寿門松』元文三年刊　五巻の例）

大抵右の如し。（注11）

⑩丁付。序「初口」とし、目録「二」より丁付はじまる。

巻二以下も第一葉（目録丁）丁付「二」とし、第九葉の丁付けを「十ノ廿」とす。

凡そ、享保五年以降の八文字屋浮世草子の版式上の特色はかくの如きである。其故、例えば書名は、本文巻頭内題より採るという図書学の原則によることができず、八文字屋刊本では、目録題を以て之に代えざるを得ないのである。

以上十項は、享保五年以降と限定して見る時は、ごく末期のいくらか（注12）を除いては、ほぼ例外なく当嵌るのであるが、享保三年以前の作については、必ずしもこの通りでない。（享保四年は、八文字屋方からは浮世草子は刊行されていない。）

㈢　書誌より見た時代区分

いま、書誌上より観察した場合に、次の如く八文字屋浮世草子を区分することが出来る。

第一期　元禄十四年～享保三年（十八年間、作品数二十八）

第二期　享保五年～寛延二年（三十年間、作品数七十二）

第三期　寛延三年～明和六年（十四年間、作品数二十六）

第四期　安永元年～天明六年（十五年間、作品数五）

右の区分は、全く形態書誌上より観察したものであるが、興味深いことは、その区切りが、長谷川強氏の示された（注13）八文字屋を中心とする浮世草子の時代区分と、ほぼ符合することである。即ち、

㈠八文字屋興隆期（元禄十三～宝永末）

㈡八文字屋江島屋確執期（正徳初～享保三）

㈢八文字屋全盛期（享保初～享保末）

㈣八文字屋守成期（元文初～寛延三）

㈤八文字屋退転期（宝暦元～明和三）

㈥浮世草子衰滅期（明和四～天明三）

今私の区分した第一期は、長谷川氏の所謂㈠㈡に相当し、第二期は、同氏の㈢㈣に相当し、第三期は㈤に、第四期は㈥に、それぞれほぼ合致するのである。

そこで、以下に於ては、実際の書誌に即し乍ら、右の年代区分に従って、八文字屋の刊行史を跡づけて行きたいと思う。

一、第一期（元禄十四～享保三）

この期は、浮世草子の世界に八文字屋が乗り出して来て間もない期であるから、色々な面で、試行錯誤的な処が見受けられる。従って、書誌的には必ずしも統一がとれているとはいえない。

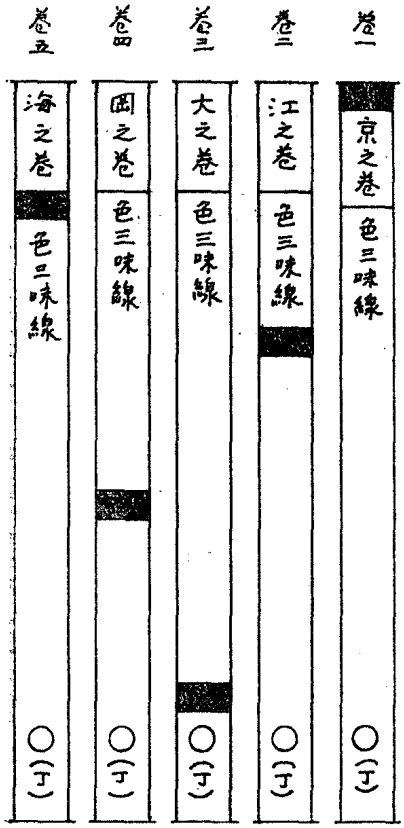
第二期以後には、決って正月に売出されて「春草紙」という異名まで出来た（注14）八文字屋刊本も、この第一期には、特に左様に定っていたとは思われない。実物に即して確かに正月刊と確認し得るものは、この期二十八点のうち、僅か三点にすぎないのである。第一作たる『けいせい色三味線』の元禄十四年八月刊をはじめとして、刊行月は二月、四月、七月、八月、九

月、十一月等に広くばらついていて、この期の八文字屋刊本には「春の慰み」というような性質は少しもなかった事が知られる。

同様に、書誌上の諸事項にも各種のばらつきがあって、第二期以後の、見事に統一のとれた八文字屋刊行本とは、鮮やかな対照を以てながめることが出来るのである。本来ならば、その全作品に就て書誌を記した上で、この様なことを論ずべきかと思うが、紙幅の都合上それは不可能であるので、問題のある幾つかの作品を選んで書誌を略説し、その推移を見てゆくことにする。（諸本の内、出来るだけ善本を選んで書誌を記述す。）

(1)けいせい色三味線　五巻　元禄十四年刊　国会図書館蔵。

美濃二ツ切横本五冊。浅葱色無地原表紙（巻三のみ改装）。巻二及巻三原題簽。寸法十二・三糎×十八・二糎。序一丁（年記及作者名なし。）。巻立、「京」「江戸」「大坂」「鄙」「湊」の順。（題簽による）。各巻首に遊女名寄。内題なし。目録題「けいせい色三味線」。四周単辺。無界。毎半葉十五行。版心左図の如し。



匡郭寸法十一糎×十七糎（京之巻本文首丁オに於て）。挿画セリフ付刻。尾題（巻五奥付に）「色三味線終」。巻五奥付尾題の次に『好色一代曾我』予告を刻し、その奥に刊記次の如し

元禄十四年八月吉日
ふ屋町通せいくはんじ下ル町八文字屋八左衛門板

（丁付）序「序」名寄（各巻共）「名（幾）」本文㈠「三」―「廿ノ卅」―「六十三」㈡「三」―「廿ノ卅」―「初卅三」「後卅三」―「五十二」㈢「三」―「廿一ノ卅」―「五十五」㈣「三」―「廿ノ卅」―「卅七」㈤「三」―「廿ノ卅」―「卅九」

（備考）本書は印面より見るに、巻五の本文のみはずっと後印本の配補。但し奥付は初印時のものを取合せてある。

本書の成立に就ては、長谷川氏の論考（注15）に詳しいが、この版心の形式より見ても、本書が当初三都三巻を以て刊行の予定であったのを、急に後の二巻を差し加えた事が明白である。首三巻だけであれば、正しくこれは八文字屋様式の版心型式を具有している。してみると、本書の後二巻は、首三巻の板下若しくは板木が出来てしまってから俄かにとってつけられたものと推定し得るであろう。その時に、巻頭名寄が付加せられたのだということになれば、これは相当慌しい作業であったに違いない。名寄の杜撰を後に修訂した事実も、かかる理由によるらしく思われる。ともあれ、本書の特例的な版式（かかる版心型式は八文字屋刊本中唯一の例外的型式である。）が、八文字屋浮世草子出発前夜の慌しさや、その活気をまでも、私共に伝

え来る如く看取されるのである。

尚、管見では、初印本は国会本だけの様で元禄十五年の後修本として刊記を有するものに、都立中央図書館加賀文庫蔵本、赤木文庫蔵本があるが、加賀文庫本は印面の磨損甚しい後印本である。この外、東大附属図書館霞亭文庫蔵本、東洋文庫岩崎文庫蔵本、天理図書館蔵本、早大附属図書館蔵本の各本は改装時に刊記奥附を脱したものと認められる。このうち、東洋文庫蔵本と早大蔵本の二者は印面の磨損少ない比較的早印本であるので、印行は加賀文庫蔵本などより遙かに早いものと信ずる。が、いずれにしても、国会図書館蔵本を除く諸本は、すべて元禄十五年修本又はその後印本である。以上後修各本の印の早後は必ずしも厳密に確定する事を得ないが、少くも加賀文庫蔵本などは、最も晩く印行せられたものと信ずべく、その印行年次は江戸後期に下るものと思われる。この元禄十五年修本は、刊記の年月の数字を埋木して「十五年二月」に修し（上記。印が埋木した字）、更に、大坂の巻の名寄せの名などを一部埋木によって修訂してある。詳しくは、長谷川氏の論考に拠られたい。いずれにせよ、全巻初印の完本を私は未だ見ない。本書は印面の磨損せる伝本が多く、その印行の繁たりしことは想像に難くないのである。

(2)風流曲三味線　六巻　宝永三年刊　東京大学附属総合図書館霞亭文庫蔵。

美濃二ツ切横本六冊。縹色無地改表紙。後補書題簽。寸法十二・六糎×十六・九糎。各巻目録一丁。序なし。目録題「風流曲三味線」。四周単辺。無界。毎半葉十五行。匡郭寸法十・六糎×十六・九糎。版心八文字屋様式。巻標黒格。（但巻六全丁及び巻二の十二丁・卅八丁は巻標なし）。挿画セリフ付刻。各巻尾「京初巻終」「二巻終」「三ノ巻終」「四ノ巻終」「五之巻終」「六巻終」と刻す。巻六奥付に『当世御伽曾我』八巻の刊行予告を付し、その奥に次の如く刻す。

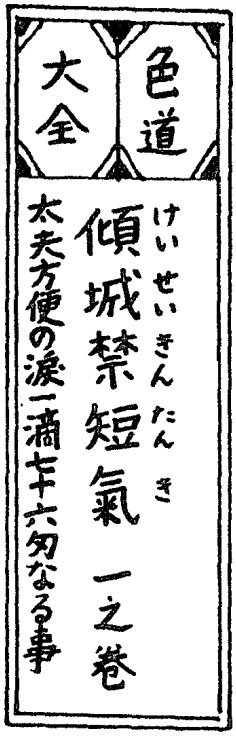
右之本追付出し申候御しらせのため
こゝにしるす
宝永三年戊七月吉日
ふ屋町通せいぐはんじ下ル町八左衛門板（八文字屋）

各巻丁付次の通り㈠目録「初口一ノ四」―「廿ノ卅」―「五十五」㈡「初口一ノ四」―「廿ノ卅」―「六十」㈢「初口一ノ四」―「初ノ廿」―「又〇廿ノ卅」―「四十八」㈣「初口一ノ四」―「廿ノ卅」―「五十四」㈤「初口一ノ四」―「廿ノ卅」―「五十三」㈥「初口一ノ四」―「廿ノ卅」―「五十」（備考）霞亭文庫蔵本は巻一のみは後印本の配補。所見本中右の奥付を有するものは霞亭文庫蔵本ただ一本である。天理図書館蔵本は、宝永七年の修印本。修訂箇所は微々たることであるが、奥付所刻予告文のうち「追付」の二字を削去して空格となし、更に刊年記の「三」を「七」に、「戊七」を「閏八」に夫々埋木して改めてある。広島大学蔵本は、巻一～五は早印の善本であるが、巻六のみは天理蔵本と同程度の

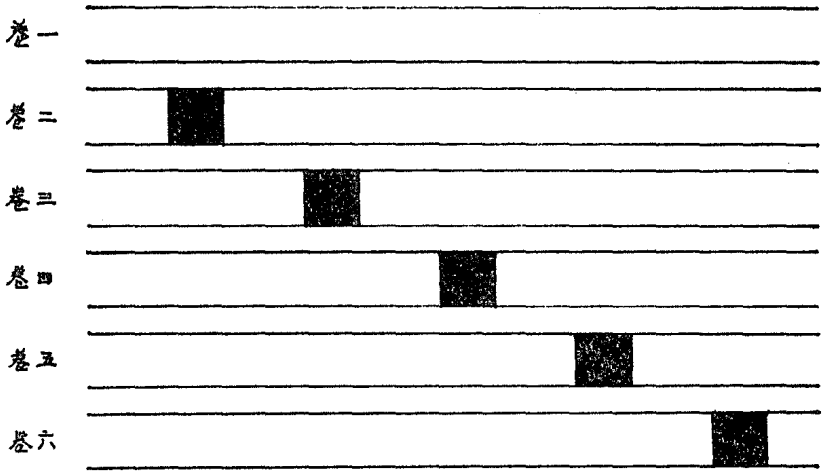
後印本を配補してある。ただし奥付を欠く。又、早大附属図書館蔵本も奥付を欠く改装本であるが印面より推定するに天理蔵本と同じ期の印本であろう。これ以外の下記の諸本は、いずれも刊記奥付を欠く更に後印の本である。即ち、慶應義塾大学蔵本、赤木文庫蔵本、東北大学狩野文庫蔵本、都立中央図書館加賀文庫蔵本、同特別買上文庫蔵本がこれである。但し、狩野文庫蔵本巻五と、都立中央図書館特別買上文庫蔵本巻三の二者のみは印面の鮮新な早印本の配補である。本書も又、多く刷り立てられたと覚しく、印面の損耗せる後印本のみ多くして、完全な初印本を未だ見ない。

本書の丁付の如きは、他の八文字屋刊本に例を見ない方式であって、これなども未だ版式上の整斉を見ない段階の態をよく表わしているのである。

(3)傾城禁短気　六巻　宝永八年刊　東京大学附属総合図書館蔵。横綴半紙本六冊。淡縹色雷紋繋地に唐草紋様空押行成表紙原装(カ)。原題簽(左図の如し)寸法十四・八糎×二十二・三糎。



(外題左の副題は東大本擦損のため読めず。名古屋大学岡谷文庫蔵本を以て補読せり。)以下の各巻もこれに同型式である。その一々の副題は今省略に従う。序一丁。作者名「八文字／自笑」。序年記「宝永八年卯月中旬」。目録各一丁。内題なし。目録題「傾城禁短気」。三方双辺(但序丁は四周双辺。匡郭の意匠は(二)ノ(B)項参照。)無界。毎半葉十四行。匡郭高十三・二糎。版心左図の通り。



各丁ノドに耳格を設けて略題（巻一は「たんき」、巻二以下「きんたん」）、巻付　丁付を刻す。尾題なし。各巻末に「一（～六）之巻終」。

巻六巻末奥付丁に『情ひな形』五巻『当世御伽曾我』八巻『野傾咲分色孖』五巻の三点の広告を列記し、その次に、次の如く刻す。

右三色共ニ　本出し申候

宝永八年卯月吉日

ふ屋町通せいぐはんじ下ル町八文字屋八左衛門板

（丁付）㈠序「初口一」―「卅三」㈡目録「二」―「廿ノ卅」―「四十二」㈢同「二」―「廿ノ卅」―「四十四」㈣同「二」―「卅四」㈤同「二」―「廿ノ卅」―「四十二」㈥同「二」―「廿ノ卅」―「卅九」（備考）本書にも屢次に亘る印本があって後印本が殆どである。東大本は、比較的早印本であるが、奥付の「右三色共ニ」の下に二字分空格あるは第二次印以降の後印本であることを証している。初印本は、東北大学狩野文庫に存するが、初印時当該部分は、「右三色共ニ来月本出し申候」とあったのである。「来月」二字を削去したのは、広告の三点が既刊となったからであろう。するとどうしても、ここに空格ある本は正徳三年以降の印本であるとせねばならぬ。但し、惜しむらくは、狩野文庫本は、巻六のみが初印本であって、巻一～五は可成下る後印本の配補である。尚、この初印本の巻六のみの端本は、慶大斯道文庫にも蔵する。又巻二と五のみの初印と認むべき本の端本は、都立中央図書館加賀文庫に存するが、未だ初印の完本を見ない。東大本と同じ程度の後印本は、京都大学国文学研究室にも一本ある。（但、原奥付を去って新紙を補ってある）。本書は、更に後印になると、この奥付を全く去ってしまうのである。この無刊記後印本は、総じて印面甚だ悪く印行は余程下ると見なければならない。名古屋大学岡谷文庫蔵本（取合せ本。存四冊）、天理図書館蔵本（取合せ本）、東洋文庫岩崎文庫蔵甲乙二本、都立中央図書館特別買上文庫蔵本、同加賀文庫蔵別本、赤木文庫蔵本（この本は空格ある奥付を有するが、奥付のみは配補にして本文は後印。）、広島大学蔵本（但し巻四のみは早印本の配補）等がこれである。この無刊記の後印本については、天明頃の菱屋治兵衛（京）の蔵板目録（慶大図書館蔵）に、「傾城禁談気（ママ）、六冊」と見えているから、或いは板元菱屋方かとも疑われる（注16）。又下って文政十二年の大坂河内屋吉兵衛、今津屋辰三郎方より印行の購板後印本が関西大学にあるが今の所未見。

本書は、八文字屋が二ツ切横本から目先を変えて打出した横綴半紙本による初の作品である。本書に先立って、宝永七年刊『けいせい伝受紙子』巻五巻末に、蛇足的部分を附して「追付傾城禁短気（けいせいきんたんき）といふ物に委（くわし）く説（とき）あらはすべし」などと云い、更に又、挿画中にも寺の絵を描きて、その柱に一札をかけて曰く「傾城禁短気近月より法初る」とし、又作中人物のセリフとして、「扨もきゝごとかな」と評判せしめて、ちゃっかりと本書の宣伝を

なしている。蓋し、八文字屋の、新書型本に対する意欲を窺うべきであろう。序、刊記の形式、版心の処理など、大分整ってはいたが、丁付の附け方など一定せぬ処もあって、第二期以降の作品群の形態とは、なお些かの逕庭を見るのである。然し乍ら、本書も又、非常な好評を博したことは、伝存本多く印面の磨損甚しきを見ても知るべきである。

今、右の『傾城禁短気』の奥付広告中に『当世御伽曾我』八巻の名が見えていることを誌しておいたが、実際には、この書は、正徳三年正月に『当世御伽曾我』同二月に『当世御伽曾我後風流東鑑』の前後編併せて十巻として刊行されたのである。尚、同年三月にも奥付広告文と刊月記に入木修整を施した後(修)印本が存する。即ち、もと「右三色共に近日本出し申候」とあったのを、「段々本出し…」に、又「正徳三年癸巳二月吉日」とあったのを「三月」にそれぞれ改めたのである。(名古屋大学岡谷文庫蔵本)。この両書は、前後編合十巻という形で八文字屋が刊行した作品群の最初のものであって、同類例に次の如きものがある。

正徳四年『女男伊勢風流』『愛敬昔色好』各三巻三冊　合六巻　二つ切横本。

正徳五年『風流詫平家』『義経風流鑑』各五巻五冊　合十巻。二つ切横本。

享保十三年『記録曾我女黒船』『本朝会稽山』各五巻五冊　合十巻　大本。

享保十四年『御伽平家』『風流扇子軍』各五巻五冊　合十巻　大本。

享保十七年『曦太平記』『楠軍法鎧鑑』各五巻五冊　合十巻　大本。

以上の諸作は、その外題からも察しられる如く、古典の「やつしもの」である。このような場合、前編の巻標は「■」とし、後編の巻標は「■■」とするのが例となったが、それはこの正徳三年の両作に始ったのである。第一期の作品群にあっては「■■」の巻標を刻せるものは、かかる前後編続刊物にほぼ限られている。これは、前編後編一応独立の版本という体裁をもち、而も殆ど同時に刊行せられたために、印刷製本過程で双方が紛乱を来さぬ様にとの配慮でもあろう。(但、第一期に於ける唯一の例外は、正徳頃刊無刊記『当流曾我高名松』大本五巻五冊が、巻標を「■■」とせる例であるが、これと、『名物焼蛤』の二点は、八文字屋刊本中、大本として黒口を有する唯二つの作であって『焼蛤』の方は、中縫に単黒格を付して巻標としているのであるから、そのことと考え合わせねばならないかもしれぬ。)

(4)百性盛衰記　四巻　正徳三年刊　京都大学附属図書館蔵。大本四冊。淡褐色無地表紙原装。原題簽。外題「(新板／絵入)百性盛衰記」。寸法二十四・四糎×十七糎。序なし。各巻頭目録一丁。目録題「百性盛衰記」。内題なし。四周単辺。無界。毎半葉十行。匡郭寸法十九・七糎×十四・四

糎。版心八文字屋様式。巻標黒格。尾題なし。巻尾に「一之巻終」「二ノ巻終」「三之巻終」「四ノ巻終」と刻す。刊記「正徳三年巳二月吉日、中嶋又兵衛板」

(丁付) ㈠「二」―「七ノ十五」―「廿三」㈡「二」―「八ノ十六」―「廿」㈢「二」―「八ノ十七」―「廿三」㈣「二」―「十ノ廿」―「廿四」

本書には「八文字屋八左衛門板」の刊記を有する(同板木にして、書肆名のみ改めてある。)本もある。(国会図書館蔵本)、ただし国会本は、江戸後期に大坂早川兵助求板本として印行された後印本であるので、今この両書を比較しても直ちにその関係を明らかにすることは難しい。然し乍ら、

㈠四巻四冊という構成の異色なる事

㈡板下書・挿画とも、例えば『当世御伽曾我』など同期の八文字屋刊本とは別筆であること。(但、本書板下は一筆ではない。)

㈢大本で毎半葉十行という版式は八文字屋刊本には他に例がない。

㈣挿画にセリフを付刻しない。

などの理由から、恐らく中嶋又兵衛刊本が先で、八文字屋板は求板後印本なのであろうと推定している。ただ、版心の様式など八文字屋式を採り、丁付も当時の八文字屋のそれに近い処からみて、八文字屋の指導下に中嶋から刊行されたものを、後に八文字屋が求板し、書肆名を入木して改めて印行したものと思われる。寛保元年刊『魁対盃』(国会図書館蔵本)『逆沢潟鎧鑑』(早稲田大学蔵本)両書の巻末なる蔵板目録には、本書を掲げないが、寛保三年刊『雷神不動桜』(国会図書館蔵本)の巻末蔵板目録には収めてあるところを見ると、凡そこの頃に求板したものかとも推定される。類例として、同じく正徳三年正月刊『今川一睡記』同五月刊『当世信玄記』がある。この二点は前記寛保元年の蔵板目録に入っている処を見るとそれ以前の求板かと思われるが、この両書に就ては、八文字屋の刊記を有するものを見ない。又正徳六年刊『曾我鎌倉飛脚』なども、中嶋より八文字屋の版式に倣って刊行された作であるが、これは八文字屋に求板せられた形跡はないから、今対象から外しておく。冒頭に「八文字屋と他書肆との共同出版」として「相板」と言わなかったのは、この種のものを考慮してのことである。即ち、後に江嶋屋と八文字屋が「相板」と銘打って刊行した諸作に限定されるのを避けたのである。この類例に、江戸鱗形屋孫兵衛より刊行の『風流東海硯』(五巻。元文二年刊)『禁短気次編』『禁短気三編』(各五巻。明和二年刊)がある。右のうち、後の二書は、刊記には板元名を「鶴鱗堂山野孫兵衛」とするが、その住所は「大伝馬町三丁目」であるから、『風流東海硯』と同じく、鱗形屋孫兵衛と推定したのである。なお、元文六年(寛保元年)刊『逆沢潟鎧鑑』(早稲田大学蔵本)所附八文字屋蔵板目録には、『風流東海硯』の所に「江戸板」と注記する。然るに、寛保三年刊『薄雪音羽滝』(東北大学狩野文庫蔵本)所附蔵板目録(八文字屋)には、この「江戸板」という注記が無い。(『逆沢潟鎧鑑』の蔵板目録と『薄雪音羽滝』のそれとは別

板。）次いで宝暦九年刊『契情蓬莱山』（岩瀬文庫蔵本）等所附の八文字屋蔵板目録（上記二種のいずれとも別板）になると、『風流東海硯』の名を掲載しないのが怪しまれるが、後に明和四年に八文字屋から板木を購って大坂の升屋が印行した『風俗傾性野群談』（享保二年序刊）（京都大学顕原文庫蔵本）所附の奥附求板目録には掲載されているから、凡そ寛保初年頃鱗形屋から八文字屋に板木が移ってそのまま蔵せられていたのであろう。『禁短気次編』『同三編』も、明和六年刊『略縁記出家形気』（大阪府立図書館蔵本）等所附の八文字屋蔵板目録に出ているから、やはり鱗形屋が（八文字屋の協力の下に）刊行したものを、後に八文字屋で求板したものと思われる。然るに、この二書は、前述の『風俗傾性野群談』所附升屋求板目録に出ていないばかりか、やはり明和四年に升屋が求板して、恐らく明和八年に印行したと覚しき（注17）『那智御山手管滝』（岩瀬文庫蔵本）所附の升屋彦太郎の蔵板目録にも入っていないので、こちらは姑く八文字屋の手許に残ったものらしく思われる。

以上の如く、江戸の鱗形屋孫兵衛の刊行の三点についても、中嶋又兵衛刊行の前述の諸書と同様の経緯を考え、同じく八文字屋との共同出版書と考えるのが妥当であろうかと信ずる。

同じき享保年間の八文字屋刊本のうち、問題ある一書として、享保三年十一月刊『傾城竈照君』五巻、がある。

(5)傾城竈照君　五巻　享保三年刊　大東急記念文庫蔵。

美濃二ツ切横本。五冊。香色無地表紙原装。紅紙原題簽（但巻一は剝落）。題簽意匠左の如し。

（注18）

寸法十二・八糎×十八・三糎。序半丁（年記・作者署名なし）。口絵見開一丁分。「山桝太夫抱女郎名寄評判」三丁半。各巻々頭目録一丁。内題なし。目録題「けいせい竈照君」。四周単辺。無界。毎半葉十二行。挿画中セリフ附刻。匡郭寸法十・九糎×十六・九糎。版心八文字屋様式。巻標黒格。尾題なし。各巻末に「一（〜四）之巻終」「五巻終」と刻す。刊記次の如し。

享保三年戊ノ中冬
ふ屋町通せいぐはんじ下ル町八文字屋八左衛門板

（丁付）㈠序・名寄「初一〜初五」目録「二」―「十ノ廿」―「廿七」㈡「二」―「十ノ廿」―「廿六」㈢以下巻㈡に同然。各最終丁付㈢「廿七」㈣最終丁は裏表紙見返になっていて丁付なし。その前の丁「廿七」。㈤最終丁は裏表紙見返（奥付）で丁付不明。その前の丁「廿五」

（備考）巻二裏表紙見返しに『百人女郎品定』を本の絵入にて広告し、「（上略）西川筆ニ而御たしなみ草紙にいたし追付出し申ゆへ御しらせのため書印申候」と口上を附刻

している。但しこの広告丁は、正徳五年刊『義経風流鑑』巻末に附せられたものと同板で、ただその「正徳五年未ノ卯月吉日」とあった年記を削去してここに流用したものと思われる。又巻三の裏表紙見返しには、『武徳鎌倉旧記』前編十二巻（「全部廿五巻之内」とす）『西川ひな形』全部五巻『諸分色目利』全部五巻『寝槃伽羅枕』全部三巻『野傾色孖』全部五巻の五点を広告し、うち『武徳…』『西川…』『野傾…』の三点には既刊の旨を附刻し、残る二点については、「二色は近日本出し申ゆへ御しらせの為書印申候以上」と口上がある。但し、既刊を告知する「本出し置申候」「此本は出し置申候」の部分は入木かと思われ、上記の近刊予告の口上に就ても何らかの修板があるように見えるから、この広告丁もまた、以前に刊行された別書に附せられたものに一部修を加えてここに流用したものかと考えられる。然しこれについては、これ以前の刊本に同板の広告を附した例を未だ見出し得ないので疑いを提出するにとどめたい。本書は、都立中央図書館加賀文庫にも同じ八文字屋の刊記を有する一本（但し、こちらは改装合綴本にして、右の広告部分は一切無い。）が存するが、これは大東急記念文庫蔵本に比しては後印本と認められる。即ち、巻一の「七」と丁付のある丁の表、一～三行目あたりを見ると、殆ど判読不能な程の板木の損傷が認められ、かかる損傷の無い大東急記念文庫蔵本とは明確に印の早後を画し得るのである。扨、次に天理図書館蔵本の刊記は次の通りである。

享保三年戊ノ中冬
大坂北ほり江市の側　綿屋喜兵衛板

所謂「綿屋印本」がこれである。東洋文庫岩崎文庫蔵本、国会図書館蔵本の二本もこの綿屋印本である。（但し二本ともに刊記の部分を破損）。そこで、この八文字屋本と綿屋本とを比べると、綿屋本の方は、一部覆せ刻になっているのと、一ケ所板木切継による修板箇所のあることが知れる。即ち、巻一の名寄のうち「初四」と丁付のある一丁、巻四の最終丁（裏表紙見返し。半丁）、巻五の最終丁（裏表紙見返し、刊記丁、半丁）の三者は、明らかに綿屋印本の方が覆せ刻になっている。又巻一の「七」（丁付）の丁の表第一行目の、上から六字目以下は、綿屋印本では板木に埋木して修してある。即ち、この箇所が、加賀文庫蔵本に見た如く、板木の損傷甚しく、全く読み得ぬ事に対する処置であろう。ところが、大東急記念文庫蔵早印本と、綿屋修印本とを比較すると、修板箇所に於ては、文言に相異があるので左に掲げて注意しておきたい。左の通りである。

（大東急記念文庫蔵原刊本）
聞度ない。そなた達のさるまつが異見聞事に
（天理図書館蔵綿屋修印本）
聞度ない。そなたがたいへいらくをべらくと聞事に（傍点林）

右の如く、傍点部が埋木による修板箇所であるが、全く別

の文章になっている。

本書は大坂新町の遊女屋茨木屋幸斎が奢侈僭上の沙汰あるによって召捕闕所所払に処せられた一件を山椒太夫にやつして脚色した際物であるが、この事件が当時の京阪の哥舞伎や浄瑠璃に、いち早く脚色されて、一種のブームを巻起したこと、石川潤二郎氏（『「傾城竈照君」と「傾城山枡太夫」と』国文学研究第二十六集）、長谷川強氏（「浮世草子研究資料としての絵入狂言本」法文論叢第十八号）大橋正叔氏（「茨木屋幸斎一件と海音・近松」近世文芸第二十七・二十八合併号）等従来論ぜられ来った所であって、本書は、その演劇方面よりの影響下に（即ち茨木屋物ブームの当て込みによって）成立したことが認められている。一件の落着したのが享保三年の九月中のことであるから、十月中に競って上演された浄瑠璃、哥舞伎を取り込みつつ、閏十月を挿んで早速その翌々月十一月に「竈照君」を刊行してのけた八文字屋のスピード出版ぶりはまさに目を瞠るものがある。折しも其磧との和解を得た八文字屋八左衛門の壮んなる意気が窺われるようである。然し、本書も又、八文字屋の凋落に際会して、明和四年中に大坂升屋大蔵方へ売却されたこと、京都大学文学部頴原文庫蔵『風俗傾性野群談』明和四年印本所附升屋蔵板目録等によって明らかである。ただし升屋印行本は未だ見ない。やがて板木は三転して同じき大坂の綿屋の手に渡ったものかと思われ、その時期は明確に出来ないが、渥美清太郎氏編「系統別歌舞伎戯曲解題（十）」（「芸能」昭和三十五年二月号）に拠ると、寛政元年五月、大坂堀江座に於て、やはり茨木屋幸斎物である「博多織恋錦」が上演されているから、同じ町内にあって、予て狂言本や番付類などの刊行を業としていた綿屋喜兵衛によって、この演目に対する当て込みから求板印行されたものかと推定される。その際、如何なる理由によってか、刊記の丁の板木のみは綿屋の手に入らなかったものと考えられる。そこで綿屋方に於ては、止むを得ず当該丁を覆せ刻にして印行したのであろう。即ち、覆せ刻になっている前述の各丁を合計すると丁度二丁分に相当し、板木は表裏二丁分を一板に刻するのを例とすることを思い合せるならば、この覆せ刻による修印部分は、刊記の丁の板木一枚が綿屋の手に入らなかったと推定することによって説明出来るであろう。そして同時に、板木の損傷甚しい巻一の「七」の丁の一行を埋木して修整したものであると考えられる。ただ、この綿屋修印本を見ると、右の埋木の一ケ所を除く諸丁は、概ね損傷少なく、全体に磨損も余り見られないので、原刊時より印行された部数はさして多くはなかったらしいことが推定される。板木切継部分の文言が相異する事実も、綿屋が修板するに当って、初印時の当該箇所を明確に判読し得る本を入手し得なかったことを意味するのであろうから、以て本書の流布の程度を知るべきかと考える。

以上、ごく一部であるが、第一期の書誌的諸事項を見て来た。すると、その書型・版式ともに、未だ不統一なことが多く、然し乍ら、第二期の統一された版式の一つ一つは、既に悉くこの

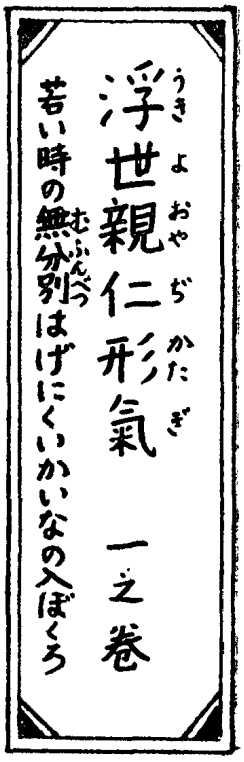
期に胚胎している事が分るのである。そして今、この期を総評すれば、『西海太平記』『名物焼蛤』『当流曾我高名松』など刊行書肆の点で尚疑うべき作もあり、中嶋又兵衛などとの共同関係も存し、其磧との確執というような事情もあって、八文字屋としては未だ十分な安定を得ないことが、版式等の上にも反映しているのを見ることが出来るのである。

二、第二期（享保五年～寛延二年）

享保三年中に江嶋其磧と八文字自笑との間に和解が成立したことは周知の通りである。従って、江嶋其磧の名は、その翌々年享保五年刊『楠三代壮士』『風流宇治頼政』に至って八文字屋刊本としては初めて見えるのであるが、実は第一期二十八作品の内、八文字自笑の作者名を顕わしたものは、九作に過ぎないのであって、第二期以降の作品が、必ず序末に作者名を誌すのと好対照である。前述の如く、この期以降の八文字屋刊行浮世草子は書誌極めて斉一であるので、左に代表的なものを一、二掲げるにとどめておきたい。

(6)浮世親仁形気　五巻　享保五年刊　名古屋大学図書館岡谷文庫蔵。

横綴半紙本五冊。淡縹色雷紋繋桐唐草紋様空押行成表紙原装。原題簽（左図の如し）



外題脇副題各巻同形式。（今之を略す。）寸法十五・二糎×二十一・九糎。序一丁。序末に「鶯の／はつ子の日／作者江嶋其磧囲（茂／知）／八文字自笑囲（鼎形に亀の字）」。目録各巻首に一丁。内題なし。目録題外題に同じ。四周単辺。無界。毎半葉十四行。版心（在書根）八文字屋様式。巻標黒格。各丁ノドに耳格を付し、略題（「おやぢ」）、巻付、丁付を刻す。匡郭寸法十三・二糎×十九・二糎。挿画セリフ付刻。巻五巻末廿八ウに『役者枕がへし』三巻『紋作色目利』三巻既刊広告を付し、尚廿九丁（奥付丁）に『風流宇治頼政』五巻『楠三代壮士』五巻の既刊を広告し、その奥に

右は皆々本出し置申候跡ゟ追々新板出し申候

享保五年子ノ正月吉日　八文字屋八左衛門　あじまや一良左衛門　相板

と刊記を刻す。尾題なく、巻末に「一（～四）之巻終」「五ノ巻終」と刻す。

（丁付）㈠「一」―「十ノ廿」―「廿七」㈡「二」―「十ノ廿」―「廿七」㈢㈣㈤は㈡に同然。各終丁「廿五」「廿八」「廿九終」

（備考）本書も屢次の後印本があって、後印本は巻末の広告を削去し、奥付を附さない。東京大学霞亭文庫蔵本、東

洋文庫岩崎文庫蔵本、京都大学図書館蔵本、岩瀬文庫蔵本、早大附属図書館蔵本（存首三巻）、国会図書館蔵甲乙二本、天理図書館蔵本、都立中央図書館加賀文庫蔵本などがこれである。尚、広島大学国文学研究室所蔵の一本は名大岡谷文庫蔵本に同じき早印本であるが巻三のみは後印本の配補である。又、名古屋大学図書館皇学館文庫にも初印の一本を蔵するが、汚損の甚しい本である。国書総目録によれば、本書には元文元年、享和三年の後印本が存する由であるが、これらは未だ見ることを得ない。

総じて横綴半紙本は、本書と殆ど同じ版式に拠るのが例となっているが、勿論、作品により匡郭が三方双辺になることなど小異がある。細説する紙幅を得ないので、詳細は別稿を草したいと思う。

かくの如く、享保五年・六年の両年に刊行された『楠三代壮士』『浮世親仁形気』『風流宇治頼政』『役者色仕組』（以上享保五年）『女曾我兄弟鑑』『日本契情始』（以上同六年）の六点は、何れも江嶋屋と八文字屋の相板刊記を有する。

(7) 安倍清明白狐玉（あべのせいめいびやくこのたま）　五巻　享保十一年刊　西尾市立図書館岩瀬文庫蔵。

大本五冊。茶色無地原表紙。原題簽（首巻題簽欠）「（新板／絵入）安倍清明白狐玉（幾）之巻」（意匠は㈡(B)ノ②項参照）。寸法二十四・一糎×十七・五糎。序一丁。序末「当年の恵方巳（えほうみ）／午の初春／作者／其磧印（茂／知）／自笑印（鼎形に亀の字）」。目録各巻一丁。内題なし。目録題「安倍清明白狐玉（あべのせいめいびやくこのたま）」。四周単辺。無界。毎半葉十二行。挿画セリフ付刻。版心八文字屋様式。巻標黒格。匡郭寸法二十・六糎×十六・五糎。巻尾「一（～五）之巻終」。刊記次の如し。

享保十一年午正月吉日
ふ屋町通せいぐわんじ下ル町八左衛門（はちもんじや）板

（丁付）㈠「一」―「十ノ廿」―「廿六」㈡「二」―「十ノ廿」―「廿六」㈢以下㈡に同然。各終丁「廿六」「廿五」「廿四」

（備考）本書は岡山大学池田家文庫に極めて保存の良い早印本がある。

本書は、第二期大本として典型的な姿を示している。この期の刊本は、ほぼどれも同然と見て誤りでない。

さて、この期の作品に就て概観してみると、八文字屋が其磧と和解の後、周到な計画性を以て出刊して行った事が分る。即ち、次の様な事が見出されるのである。

①毎年正月に二作乃至三作刊行（注19）

②序一丁を付し、序末に作者名を署すが、自笑と其磧の記載順は、平等を期す。即ち、『安倍清明白狐玉』が「其磧―自笑」の順なれば、同年刊『出世握虎（やつこ）昔物語』は「自笑―其磧」の順とあるが如くである。この原則はかなりきちんと守られており、年三作出刊の時は、其磧を先とするもの二作、自笑を先とするもの一作、という風に作ることが殆どである。第二期後半、即ち其磧歿後の元文三・四両年は、自笑の単独名を以て刻し、元文五年以降、延享四年刊

『自笑楽日記』までの諸作品は全て自笑・其笑の名を以て刻す。

③其磧生前刊行作品に就ては、三作出刊の場合は三作共大本ということがない様に、書型にバラエティーを持たせてある。（然し其磧歿後元文五年以降は第三期末迄殆どすべて大本となるのである。）（注20）

④大本二作刊行の場合、巻標を変えて出刊。例えば、元文三年刊『善悪両面常盤染』の巻標「■」同年刊『忠孝寿門松』の巻標「■■」とせるが如し。又三作刊行の場合は内一作は「○」などの記号を以てするか、若しくは文字を巻標となすなど、同一にならぬ様工夫してある。

⑤版式は殆ど例外なく『安倍清明白狐玉』に同じ。（注21）

三十年間に亘って、上記の如く斉一な計画的出版が遂行された事は驚く程であるが、果して、かかる斉一化への志向は、その文学的水準に良い結果を齎すであろうか。読者の側からしても「正月恒例の」という事になれば、その内容が勢い演劇に依存し、古典のやつし事に終始する如き定例化の方向を辿ったとしても、これは止む事を得ぬ趨勢であったと云わねばならないであろう。一作あたりの量を見ても、第一期の其磧作品に比して、この第二期を通じて、その書冊は徐々に徐々に薄いものとなって行き、質量共に貧弱化の一途を辿って行くのである。

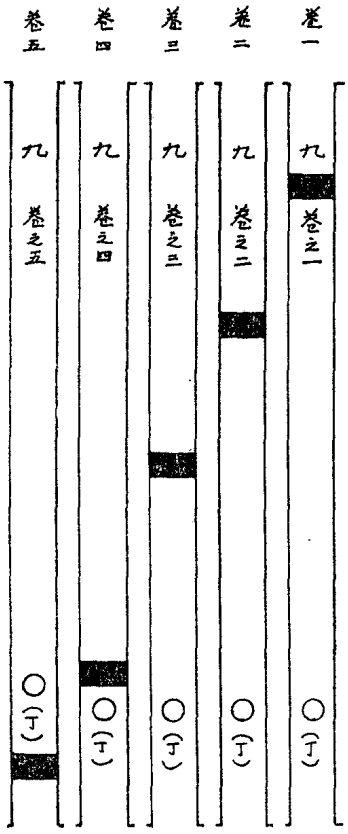
三、第三期（寛延三年～明和六年）

元文二年刊『風流東海硯』を最後に其磧の名は八文字屋刊本から消え、第二期末延享四年刊『自笑楽日記』を期に自笑の名も消える。これより姑くは「其笑・瑞笑」の名で刊行される時代が続くのである。軈て寛延三年、八文字屋は有力な代作者多田南嶺を喪う。それと符節を合するが如く、同じき寛延三年正月刊『教訓私儘育』（五巻）同『頼信瑾軍記』（五巻）以降の作は、版心の様式などに若干の変化を見せる。時代の嗜好によるのであろうか、それとも些かでも新味を狙ったのでもあろうか。が、それとても『けいせい色三味線』が二ツ切横本浮世草子を創始し、『傾城禁短気』が横綴半紙本を以て世に問うて大いに八文字屋の声価を高からしめたようなエネルギーは、最早そこには望むべくもなかった。この第三期に入っての版式改変は、ほんの一寸した小手先の細工とも評すべく、却って無気力な出版態度を強調するかの如く眺められるのである。即ち、この期新たに定められた版式は次の如くである。（典型例として『今昔九重桜』の書誌を掲げる。）

(8)今昔九重桜　五巻　宝暦十年刊　東京大学附属総合図書館蔵。

大本五冊。鼠色無地原表紙。原題簽。外題「（新板／絵入）今昔九重桜（幾）之巻」（意匠㈡(B)ノ②項に同じ）。寸法二十三・一糎×十六・一糎。序一丁。序末「辰のめでたき春作者／八文字李秀印（李秀）／同自笑印（凌雲）」とす。各巻首目録一丁。内題なし。目録題「今昔九重桜」。四周単辺。無界。毎半葉十二行。匡郭寸法十九・二糎×十四・六糎。版

心左の如し。



巻尾「一（～五）之巻終」。刊記左の如し。

寛暦十年
辰正月吉日
京麩屋町通誓願寺下ル町
八文字屋八左衛門版

（丁付）㈠「初口一」―「十ノ廿」―「廿六」㈡「二」―「十ノ廿」―「廿六」㈢以下㈡に同然。各終丁「廿七」。

（備考）巻三巻末（廿七ウ）に『都名所手引案内』『京町鑑』『梅品』の既刊広告を載せる。青洲文庫旧蔵。

所見本中では、この東大蔵本は白眉と評して可である。岩瀬文庫蔵本題簽を欠き、東北大学狩野文庫蔵本は巻一の一部に破損あり、広島大学国文学研究室蔵本は序の欠けた後印本、国会国書館蔵本は明和四年の升屋彦太郎の求板後印本。東北大学蔵本巻末に八文字屋の「読本目録」二丁分を附す。

右の如く、版心部天地に匡郭線のないのをこの期の特色とし、尚、巻標の入れ方も巻五は丁付の下に入れる。又刊記も上記の如く漢字楷書を以てする例が出て来るのは、洒落本の流行しだした漢学志向の強い時代相を思わせるものがある。第三期は、宝暦七年までは年二作出刊にして例外がない。従って、各年一本は巻標「■」とし、他方を「■■」とせるは例の如くである。然るに宝暦八年以降は年一作に減じたため、以後の作には巻標は単黒格を以てするものばかりとなる。かくて作品数は減り、書冊は愈々薄く、書型も縮小し、ここに八文字屋本は、書誌上よりしても、ほぼその命脈を失いつつあることが印象せられるのである。

四、第四期（安永元年～天明六年）

第三期末、宝暦十三年刊『風流庭訓往来』以後、明和元年～三年の間は、新作の刊行がない。何れも旧作の改題後修本でお茶を濁しているのである。次いで明和四年、遂に八文字屋は、浮世草子に見切りをつけ、板木の大半を大坂の升屋大蔵（或いは彦太郎）方へ売却してしまったこと、中村幸彦氏「八文字屋本版木行方」（『国語国文学』昭和十五年）に詳しい。かくて、淀川の荷船が、今は磨り減った八文字屋の板木を、大坂へと運び去って行ったのである。やがて、この屋台骨の傾いだ八文字屋は、住所の標記を「麩屋町通六角下ル町」と改めた。（中村幸彦氏によると同所の由である）。そうして、第三期を画して、明和六年、最後の八文字屋形式の（注22）版式を以て『略縁記出家

形気』が出刊された。これを第三期の棹尾として、八文字屋刊行浮世草子は第四の終焉期を迎えるのである。『略縁記出家形気』では、作者名を「八文舎自笑」としたが、第四期刊行本は、すべてこの名を以てする。

この期刊行の作としては『遣放三番続』『噺話別世界』『浮世壱分五厘』『真実偽虚実』『陳扮漢』の五作があるが、『別世界』『偽虚実』の二編は所在を知らない。所見三種のうち、『三番続』『壱分五厘』は役者評判記開口の寄せ集めであって、厳密には浮世草子と言えるかどうか疑わしい作であり、二ツ切横本。版心は黒口を以てし、丁付にも「十ノ廿」の如き水増しをしない。最後の『陳扮漢』は、岩瀬文庫蔵本に拠って見るに、巻頭第一丁に「噺話別世界　初中後」として、登場人物に哥舞伎役者名を配した配役表の如き躰の一丁を附し、その登場人物名は、作中人物名に一致するのであるから、長谷川氏の御推定通り（堤精二氏の御示教を得たと断ってある。）（注23）その改題本なのであろう。尚、同書は、京都大学国文学研究室蔵本にあっては、次の如くである。

(9)陳扮漢　三巻　天明六年刊　京都大学国文学研究室蔵。
半紙本四冊。（中巻は不分巻二冊）。縹色布目表紙原装(カ)。原題簽（竹牌形単辺）。外題㈠「陳扮漢〔一〕」㈡「ちんぷんかん　二」㈢「陳扮漢　三」㈣「陳ぷむかむ　四」。寸法二十二糎×十五・七糎。封面に作者八文舎自笑の口上を読上る画柄を表し、「哥舞妓もやうを浄るりに／仕立あけたる其風俗は／ちんぷんかん／むかしく近松門左衛門と／いへる大元帥八陳の／法を伝へたる並木正三／が六韜三略其一巻を／ひらき見る奈河亀助が／はかりこと幾万代を経ぬるとも／趣向は尽ぬ玉手箱と申まするの／新よみ本の発端左様に思召下されませ」と刻して序に代う。序、目録なし。内題「陳扮漢」。四周単辺。無界。毎半葉十行。匡郭寸法十八・二糎×十三・七糎。匡郭形状不同。版心白口。ノドに耳格を付して丁付のみを刻すが、丁付上に空白ありて数文字刪去せるが如し。丁付「二」より全巻通し丁付にして「五十六」迄。尾題「陳扮漢上（中下）之巻終」。刊記次の如し

天明六年
丙午正月吉日　　京東洞院通錦小路上ル町
八文字屋八左衛門板

（備考）岩瀬文庫蔵本巻頭所附役割表に黒格巻標を付す。又各巻版心所々に巻標を刪去した痕跡がある。されば『噺話別世界』はまだ八文字屋形式の版心を留めていたかと推定出来る。ただ『浮世壱分五厘』安永五年刊本所附蔵板目録では『別世界』は全五冊としてある。本書は巻内に章を立てない通巻一話物であるから、どこをどのように改めて五冊本を三巻四冊本になしたか解し難い。原本の出現に俟つ外あるまい。

いずれにしても、説話構成をはじめとして、かつて斉一を誇った八文字屋浮世草子も、今や見るかげもなく痩せ衰えて、こ

こに最期を迎えたのであった。

結　語

以上大急ぎで八文字屋の刊行史を書誌方面より観察してみたのであるが、所見の限りでは、右に述べ来った意味での八文字屋刊浮世草子に倣った版式を有する他書肆作品は升屋彦太郎など少数の例外を除いてあまり存しない。特に、通常一緒に「八文字屋本」として取り扱っている、菊屋板の其磧作品群などは、これ又菊屋式とも称すべき一連の版式があって、同化というよりは寧ろ対抗していたと評すべく、書誌の上から申すときには、これを混然一緒にして論じることは、当を得ぬことと考えるのである。

（注1）　長谷川強氏「浮世草子の研究」p21

（注2）　未見書次の通り

『情ひいな形』〔正徳2〕刊。『頼朝鎌倉実記』〔享保12〕刊。『真盛曲輪錦』〔享保20〕刊。『風流略雛形』〔寛保1以前〕刊。『当世行次第』〔明和4〕刊。『帯話別世界』〔安永3〕刊。『真実偽虚実』〔安永5〕刊。（いずれも刊年推定は長谷川氏の年表による。）

又、今回の考察に於て除外した改題後修本次の通り。

『商人世帯薬』（『手代袖算盤』の改題）『手代袖算盤』（三巻本。同上書の後修本）『けいせい卵子酒』（『遊女懐中洗濯』の改題。）『野傾髪透油』（『遊女懐中洗濯』の改竄改題本）『万福富貴自在』（『善悪身持扇』の改題）『袈裟物語』（『那智御山手管滝』の改題）『長生伏木隠』（『三浦大助節分寿』の改題）『梅若丸一代記』（『都鳥妻恋笛』の改題）『梅花柳水』（同書の再改題遡修本）『愛護若一代記』（『愛護初冠女筆始』の改題）『俊徳丸一代記』（『富士浅間裾野桜』の改題）『契情買豹の巻』（『風流西海硯』『風流東海硯』の改題）『玉椿輪廻薫物』（『風流連理鬱』の改題）『互先碁盤忠信』（『頼朝鎌倉実記』の改題）『本朝武徳名剱記』（『御伽平家』『同後編風流扇子軍』の改題）

（注3）　調査の及んだ所左の通り。

国会図書館。東洋文庫。東京大学附属総合図書館。同霞亭文庫。東京大学国文学研究室。東北大学図書館狩野文庫。慶應義塾図書館。早稲田大学附属図書館。京都府立総合資料館。京都大学図書館。同国文学研究室。名古屋大学図書館岡谷文庫。同皇学館文庫。広島大学国語学国文学研究室。東京都立中央図書館加賀文庫。同東京志料。同特別買上文庫。大阪府立図書館。三康図書館。赤木文庫。蓬左文庫尾崎久弥コレクション。西尾市立図書館岩瀬文庫。天理図書館。広島市立中央図書館。大東急記念文庫。岡山大学図書館池田家文庫。香川大学図書館神原文庫。

（注4）　例えば、享保三年正月刊『色縮緬百人後家』五巻・西沢一風作。洛東三条なわていせや仁兵衛刊本がこの書型による。

（注5）　長谷川氏前掲書　p550

（注6）　一例を挙げれば、岩波古典大系『浮世草子集』所収

『傾城禁短気』解題（野間光辰氏）に「美濃半截横本」とされたのなどは誤りである。

（注7）書の大いさだけからみると、類似の書型がなくもない。例えば、享保二年刊『（大工）雛形』などの雛形本があるが、これは、半紙を半分に切り、それを横に長く版心部で貼合せて、綴じ方は通常の横本になっている。横本奈良絵本類や、それに倣った流布本の『御伽草子』本なども同様の大いさであるが、これは特大本の二つ切とも言うべく、矢張版心は綴目の反対側に来る通常の横本形式。いづれにせよ、かかる絵本式の諸書との類似を狙ったと見ることは出来よう

（注8）前述の一風作『色縮緬百人後家』の外に、正徳二年刊『野傾旅葛籠』江嶋屋一良左衛門板、などがある。

（注9）八文字屋八左衛門の刊行書でも、絵入狂言本、狂言絵尽、役者評判記類などはこの版心様式によらない。

（注10）長沢規矩也氏御示教では、かかる巻標示形式を表す術語は存しない由である。

（注11）求板後印本の内、升屋大蔵（又は彦太郎）印本は、八文字屋の旧刊記をそのまま保存するが、更に後の再求板本（例えば和泉屋卯兵衛印行本等）になると、旧刊記の書肆名を刪去する。従って、升屋印本の改装本などに於て求板奥附を取去った本の場合など、八文字屋印本と誤認し易いので、充分の注意が必要である。

（注12）安永元年刊『遣放三番続』同五年刊『浮世壱分五厘』天明六年刊『陳扮漢』等。

（注13）長谷川氏前掲書 p34

（注14）例えば、寛延二年刊『義貞艶軍配』の序文中に「……松浦五郎が忠義まて書くらべて春草紙（はるさうし）とはなりぬ」などある。

（注15）長谷川氏前掲書 p83

（注16）「八木氏蔵板書略目録京寺町通松原上ル町北ヨリ書林芝屋治兵衛」と題せる中本形の蔵板目録。全七丁。慶應義塾図書館蔵『江戸時代書林蔵板目録類聚』所収。この書は、他書の巻末所附の蔵板目録だけを抽き出したものであって、菱屋の目録の刊年は未詳であるが、所掲書に『愚禿鈔要解』（天明元年刊）『（道三）丸散重宝記』（同年刊）などあるよりして、凡そ天明頃刊と認むべきか。終丁ウに「おもしろき読本何もひらかなゑ入也」として次の十八点を掲出。

怪談諸国物語	五冊	傾城禁談気（ママ）	六冊
近代因果物語	六冊	咲分五人娘	五冊
怪醜夜光魂	五冊	世間子息形気	五冊
鎌倉飛脚	五冊	賢女心化粧	五冊
略縁記出家形気	五冊	商人家職訓（右八其磧作）	五冊
江嶋物語	六冊	新堪忍記	五冊
忠孝琴琵（ママ）海（其磧作）	五冊	御伽百物語	六冊
本朝和歌題	四冊	金銀ねぢふくさ	八冊
軽口噺鳥	二冊	兼好諸国物語	五冊

尚、右の外に四オには『楠一生記』十二冊『武道三国志』十冊『(国性爺)明朝太平記』十冊『忠義太平記』五冊などをも掲載。

(注17) 安永元年(辰年)刊の『世間自慢顔』を予告して「来辰正月二日・本出し申候」と宣伝文を附してあるので、その前年、即ち明和8年印本かと推定する。

(注18) 各巻外題脇の副題次の通り

㈢大盡の扇はひらぎやが紋

㈣女郎のくるしみはつるぎの山屋敷

㈤栄花の夢はかんたんの能(のう)

(注19) 正月以外の刊行書は極めて少ないが、次の様なものがある。

享保五年〔三月〕刊『役者色仕組』。享保六年三月刊『日本契情始』。享保七年九月刊『風流七小町』。享保十七年三月刊『けいせい哥三味線』。享保二十年二月刊『風流西海硯』。同三月刊『風流連理鬱』。以上六点

(注20) 例えば、享保五年は大本二点、横綴半紙本一点、二つ切横本一点。又享保十五年は大本二点、半紙本一点。同十七・十八両年は大本二点、二ツ切横本一点。同二十年は大本一点、横綴半紙本二点、という如くである。

(注21) 享保七年刊『舞台三津扇』の版心様式は、前三巻は「京、江、大」の字を以て巻標となし、後二巻は黒口中に白線を刻しその上下によって巻次を標示している。又丁付の仕方が巻により一定しない等の特例がある。横綴半紙本では、元文四年刊『花襷厳柳島』の巻標の位置が、巻㈠〜㈣は例の通りだが、巻㈤のそれが㈠よりも左端に刻せられてあるなどの例外がある。

(注22) 或いは『鬢話別世界』が八文字屋様式の版式を以て刊行されたかもしれぬ。するとこの第三期末は、安永三年まで引下げてよい可能性もあるが、今確証を得ぬから一応明和六年を以て一期を画しておく。

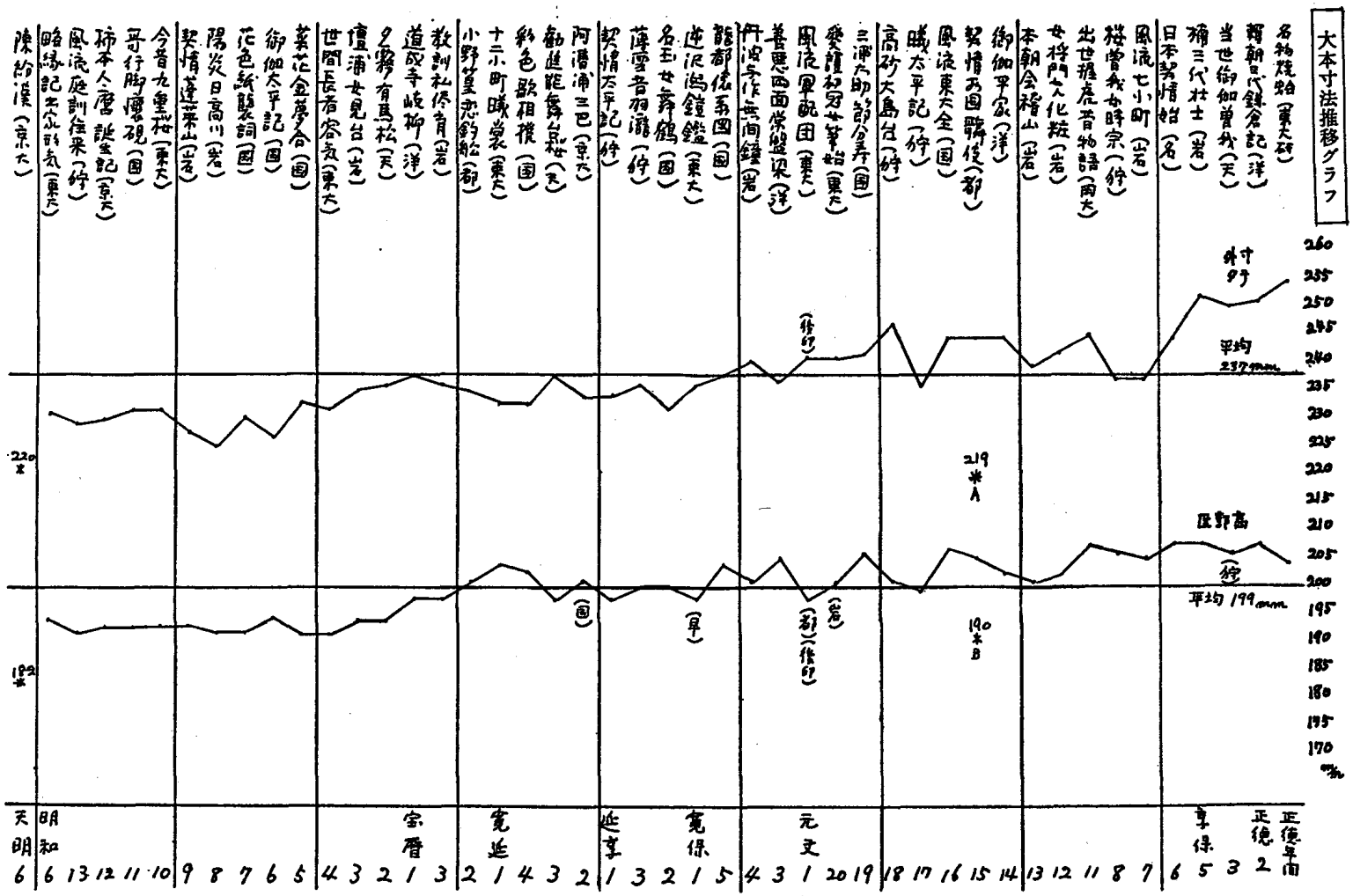
(注23) 長谷川氏前掲書 P598 P600

付記㈠

本稿は、論者が現在進めつつある、現存浮世草子類の全書誌調査の一端である。その全部に就ての総合書誌解題目録は他日別稿を草するつもりである。調査に当って、一方ならぬ御配慮を賜った霞亭文庫の小林元江氏、横山重先生、又御指正を頂いた長谷川強氏をはじめとして関係諸機関の方々に衷心よりの感謝を呈すると共に、今後共一層の御鞭撻を御願い申し上げる次第である。尚本論はトヨタ財団の助成を受けて斯道文庫に於て進めつつある「国書並びに漢籍総目録の編纂」の一端として発表するものであることを附記しておく。

付記㈡

横山重先生は、本稿印刷中に図らずも道山に帰された。調査に際しては、屢々御示教や御励ましを賜ったものを、と、遂に其の御礼を申し上げる機会を永く失ってしまった事を、返すぐも悔いるのである。今は只、御冥福を祈るばかりである。



グラフ凡例

○各年一点宛選んで作図した。その際原則として原装の早印本をとることとし、それが得られぬ場合は所見本中の最善本に拠ることとした。断切ある本、後印本、裏打本などは原則として除外した。

○グラフには、外寸のタテ寸法（上の折線グラフ）と匡郭高（下の折線グラフ）を表わした。以て本の大きさを代表せしめたのである。

○略号次の通り　（狩）東北大学狩野文庫蔵本　（洋）東洋文庫蔵本　（岩）岩瀬文庫蔵本　（名）名古屋大学蔵本　（都）都立中央図書館蔵本　（早）早稲田大学蔵本　（国）国会図書館蔵本　（東大）東京大学総合図書館蔵本　（東大研）東京大学国文学研究室蔵本　（京大）京都大学蔵本　（岡大）岡山大学池田家文庫蔵本。

○下の線の処々に略号を附した分は、上掲の本について匡郭寸法を脱したため、余儀なく他本のデータで補った分である。

○＊Aは『善悪身持扇』の外寸タテ寸法。＊Bは同匡郭高寸法。

○『風流軍配団』については、早印と認むべき本を未だ見ないので、止むを得ず後印本データで補った。